

2015年度教師海外研修(エルサルバドル) 研修報告書

学校名	大垣市立上石津中学校	氏名	野村 佳世
-----	------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

社会科の教員として、「世界」を伝える授業を行ってきたけれど、写真資料やグラフ資料では読み取れない、人々の感情や願いを生徒に伝えたいと思い、自ら現地に行き、調査を行うことで、自分にしかできない教材を作りたいと考えた。研修を通して教材にしたいと考えたのは、北アメリカ州の学習をする単元において、エルサルバドルでは、国外移住者からの送金によって国の経済が支えられていることを伝えたい。いつもなら、アメリカ合衆国を主に取り上げ、増加するヒスパニックによりアメリカ合衆国が抱える問題点を扱ってきた。しかし、今回はアメリカ合衆国に入国する中米の人々の数や彼らの願いに焦点をあて、現地の声を生徒にも届ける授業を行いたい。人々が願いをもって生きる姿に共感できる生徒がいるはずである。また、学校やショッピングモールには常に警察が銃を持ち、立っていること、子どもが育つ横には常に警察の存在があることを考えることで、エルサルバドルの生活の現状を伝えたい。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

エルサルバドルは、中米に位置しており、熱帯気候に属しているが、日中は、風も穏やかに吹き、滞在期間中は、過ごしやすかった。夜は、激しい雨に襲われることがあるが、朝になると何事もなかったように晴れの日が続く。中米の天気の様子は、面白い。

エルサルバドルの人々は、温かく、親切である印象を受けた。どこで出会っても、微笑む姿があり、アジア人に対しても親切に接してくれた。街には、色とりどりの落書きがあつたり、触れるといたそうな有刺鉄線があつたり、日本では見られない風景に感激した。また、エルサルバドルは中米で唯一カリブ海に面していない国で、食文化もオリジナル感がある。その中でも、なんといっても、「ププサ」が代表的な料理で、国民にもとても愛されている伝統的な食事である。サンビセンテやスチトトなどには、観光資源がある。現在、観光やビジネス客の集客ができる国へ発展していく方法を考えているところである。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

物質的な共通点は、日本車の数が多く、道路を走っているのは、トヨタ、ホンダ、三菱など日本でなじみのあるものばかりである。エルサルバドルの人々も日本と言えば「トヨタ」のイメージを持っているようで、日本車がエルサルバドルの人々の生活を支えている。電化製品においてもシャープなどの日本製品が多い。スーパーに行けば、日本食コーナーがあり、日本語で書かれたパッケージを見ることができる。のりやわさび、醤油などが高価格ではあるが、売られている。エルサルバドルの人々も日本食を味わう機会がある。

また、精神的な共通点は、勤勉であることである。多くのエルサルバドルの人々が、エルサルバドルの自慢は、「勤勉である」ことを挙げた。確かに研修中は、仕事をしている姿を見ることが多かったが、エルサルバドルの人々は、自分の任された仕事を黙々と精一杯こなすという印象を受けた。時には、少しだが残業もするようである。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

エルサルバドルでは、ギャング団による殺人被害が1ヶ月に約650人である。今年に入り、過去最低の殺人率であり、世界的に見ても殺人率の高い国である。一方日本は、殺人よりも、自殺の多さで言えば、世界的に見ても多い。このように考えると、両国において、「命の大切さ」を共に考える必要がある。自分の命や相手の命の尊さ、生きることや生きがいの意味を共に考え、共に生きる喜びを味わうべきである。命に対する教育が必要である。そうすることで、自分の進路に対する考え方、将来の夢の実現が叶うものである。

また、環境においては、ポイ捨てをしない、エコバックを使用する、リサイクルするなど、自分ができることを見つめ直し、環境破壊をこれ以上行わないように共に考え、実行すること、これは共に乗り越えるべき課題である。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

日本での数多くの経験や日本の生活において自慢できるもの、例えば小学校教諭の実践では、生徒が校舎を掃除する、コンクールを開催するなど、日本人が日本の学校で育ったからこそ知っていることなどのアイデアがエルサルバドルでは生かされている。日本の自慢できるモノやことをエルサルバドルで実行できるのは、青年海外協力隊であり、その活躍がよくわかった。また、日本と同じシステムの導入をする際でも、現地にしかない材料や気候、現地だからこそできることを考えて実行しているところが良い。言葉や文化、習慣が違う中で、現地の人々の自立を一番に考え、教えたり、教えられたりしながら共に活動し、共に問題点を解決しようと話し合い、成長することで、お互いに学びあう関係ができていくことが良い。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

※別掲

5. 印象に残る写真2点とその解説

●写真1… [ZUN_1013]

◇キャプション：熱帯の植物とともに…

◇解説文：ホンジュラスに近い大衆食堂での昼食、ごはんを食べるその横で、黙々とトルティーヤを作る若い女性。熱帯ならではの植物に囲まれて、お客さんのためを思い作られるトルティーヤの味は最高!!



●写真2… [ZUN_1075]

◇キャプション：こんなに静かな街、スチトト

◇解説文：とても静かで、観光都市であるスチトト。

街の道はおしゃれな石畳。タクシーやバイクもスムーズに走れ、聞こえるのは、バイクの走る音のみ。こんなに静かな場所、エルサルバドルには、落ち着ける素敵な街もあります。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・内戦については、少々聞きにくい部分もあるが、戦争の記憶が若者にはないと言う事で、年配の方にたずねると、より内戦の爪痕がよくわかる。
- ・蚊に刺されないように常に長袖を着ていたので、蚊には1度も刺されなかった。外は暑いですが、話を聞くときは、クーラーの入った部屋の時が多いので、長袖の服や羽織るものがあるとよい。

7. その他全般を通じての感想・意見など

「出会いは宝」この言葉が本当に心に響いている。エルサルバドルを共に旅した仲間との出会い、エルサルバドルの人々、エルサルバドルで活躍する日本人との出会い、どの出会いも人生の中で忘れられないものになった。国際理解教育において、どのようにしたら生徒に上手く伝えられるのか、と悩んでいた私にとって、この研修は1つの希望であり、今後も国際理解教育の推進、貢献に対して、頑張れる勇気をくれたと感じている。これからどんなにつまずいても、そこには応援してくれる、大切な仲間やエルサルバドルの人々の優しい笑顔があることを本当に誇りに思い、前進していきたい。言葉では表わしきれないこの想いを…心から、素敵な出会いをありがとう。 **Muchisimas Gracias!!**

以上